

知的障害のある人の性に関する認知・理解と性教育

河 東 田 博[※]

要約

2020年から2021年にかけ、A県B市C就労支援事業所（男10人、女10人）とD県E市F就労支援事業所（男8人、女7人）の知的障害のある人を対象に、性に関する認知・理解度調査を行った。調査内容は5領域（健康一般・衛生・人間の体・成長・性と対人関係）35項目からなり、各項目に合った絵や写真を用意した。

調査の結果、C就労支援事業所・F就労支援事業所で働く知的障害のある人の性に関する認知・理解には個人差があり、分かりやすい項目と理解困難な項目が共通に見られることが分かった。分かりやすい項目は、絵や写真自体がシンプルで、日常よく見聞きし日常生活としっかり結びついているものだった。理解困難なものは、教えられなければ分からない体の内部や性に直接関わる性交・避妊といった項目、絵や写真がたくさんある複雑な内容の項目だった。また、裸の絵や写真のある項目への回答には、恥じらいの様子が見られていた。さらに、認知・理解の程度によって、対象者を三つの理解群（高・中・低）に分けて整理できることも分かった。

知的障害のある人の性教育実践は、本研究結果を念頭に入れながら行っていく必要があると思われた。

キーワード 知的障害 性問題 性教育 認知・理解 社会的包括支援

目次

1. はじめに
 - 1.1 問題の所在と目的
 - 1.2 方法
 2. 結果
 - 2.1 対象者と障害支援区分との関係
 - 2.2 各就労支援事業所における知的障害のある人の性に関する認知・理解の特徴
 - 2.3 各就労支援事業所の男女間及び就労支援事業所（男女計）間の知的障害のある人の性に関する認知・理解の特徴
 - 2.4 性に関する三つの認知・理解群とその特徴
 3. おわりに
- 謝辞
引用文献・注
参考文献

1. はじめに

1.1 問題の所在と目的

性に関する事柄を知知的障害のある人に教えることは、難しいと言われている。抽象的思考が苦手で、論理的に整理することが難しいからである。一方で、知的障害のある人は、個人差はあるものの身体発育の面でも性成熟の面でも正常に発達してきていること¹、教えられなければ理解困難（無知）なまま放置されてしまうこと²も、明らかにされてきている。一方で、社会には性に関する情報が氾濫しており、巷に溢れる性に関する情報をどう整理し自分のものとしていったらよいか課題となっている。

そうした中、知的障害のある人が性にどのような関心を持ち、彼らの性に関する言動がどのように見られているのか、その際、周りの人たちがどのように反応し、どう対処しているのかなど、知的障害のある子どもが通う学校や学校卒業後の就労の場などでの性に関する実態把握の不十分さが見られる。

知的障害のある・なしに関わらず、誰でも成長に伴い、性的関心が芽生え、性的欲求が出てくる。性的欲求が出てくれば、性的な問題も起こってくるはずである。そこで、まず始めに、知的障害のある人の性的関心から起こる性問題に学校や学校卒業後の就労の場などでどのように直面しているのかを見ていくことにする。

2019年度末に筆者が行った特別支援学校で働く健康や性の専門家である養護教諭を対象とした全国アンケート調査³によると、「学校内で知的障害のある子どもたちの性の問題に直面したことがありますか」という問いに、大多数の回答者が、学校内で「性の問題に直面したことがある」（88.1%, n=135）と答えていた。回答者が学校内で直面した「性の問題」は、性器露出・マスターベーションの処理などの問題（37.3%）、ストーカー行為・相手の体に触るなどの問題（31.6%）、AV-DVDの頻繁な購入と利用・盗み撮りなどの問題（18.0%）、結婚相談・妊娠中絶などの問題（11.3%）、子どもがほしいなどの相談（1.7%）など（いずれもn=137）、と多岐にわたっていた。つまり、知的障害のある人は、学校に在籍している時から性に興味・関心を持ち、様々な形で性問題を引き起こしていたのである。

同様に、2019年度末に筆者が行った就労支援事業所で指導的立場にいるサービス管理責任者を対象とした全国アンケート調査⁴によると、「職場で知的障害のある人たちの性の問題に直面したことがありますか」という問いに、大多数の回答者が職場で「性の問題に直面したことがある」（70.5%, n=173）と答えていた。回答者が職場で直面した「性の問題」は、ストーカー行為・相手の体に触るなどの問題（48.1%）、結婚相談・妊娠中絶などの問題（21.2%）、性器露出・マスターベーションの処理などの問題（15.4%）、AV-DVDの頻繁な購入と利用・盗み撮りなどの問題（8.3%）、子どもがほしいなどの相談（1.7%）など（いずれもn=156）、と多岐にわたっていた。つまり、知的障害のある人は、学校を卒業してからも性に興味・関心を持ち続け、就労の場などで広く性問題が見られていたのである。

特別支援学校と就労支援事業所の調査からも分かるように、知的障害のある子どもも、知

的障害のある人も、学校で、あるいは、学校卒業後の就労の場において、性への興味・関心は変わらず持ち続け、他の人と性的な関係を持とうとしていたことが判明した。また、特別支援学校での調査と就労の場での調査とを比べてみると、就労支援事業所では、「性器露出・マスターベーションの処理などの問題」や「AV-DVDの頻繁な購入と利用・盗み撮りなどの問題」の割合が大幅に減り、「ストーカー行為・相手の体に触るなどの問題」や「結婚相談・妊娠中絶などの問題」の割合が大幅に増えていることが分かる。つまり、学校時代と学校卒業後の就労の場とでは、知的障害のある人の性問題が質的に変化していることが分かる。

学校や就労の場において、知的障害のある人の性問題に直面した際どうしているのだろうか。

特別支援学校で働く養護教諭の大多数の回答者が、子どもの「性の問題」に直面した際の対処法についても回答（87.4%，n=135）しており、概ね「性教育等」「他機関との連携等」「保護者・管理職との協議」「職員会議等での検討・支援」などの対処を行っていた。具体的には、半数近くが「職員会議等での検討・支援」（44.2%）で、「保護者・学校管理職との協議」（27.9%）、「性教育等」（7.6%）、「他機関との連携」（7.6%）（いずれもn=197）などのような対処を行っていた。性教育については、半数近くの特別支援学校で「学習指導要領に基づく対応」（45.3%，n=179）を行い、学校全体で協力し、チームを組んで指導していた。集団指導と個別指導をバランスよく組み合わせるなどの「様々な指導を組み合わせた対応」（23.5%）や「校医や家庭と連携した対応」（26.3%）、「ニーズに応じた対応」（3.4%）（いずれもn=179）などもなされていた。なぜこのような様々な方法を組み合わせながら実施しているのか、その回答が、知的障害のある子どもの「性教育」の難しさにあることが分かった。その理由として、半数以上が教育効果が不明・理解度に問題・個人差・心身の発達のアンバランス・自己肯定感の不十分さ・人との距離のとり方が分からない・くり返し指導が必要、などの「認知・理解の課題」（61.4%）や集団指導の難しさ・適当な教材教具がない・計画を立てにくい、などの「指導方法の課題」（27.8%）（いずれもn=176）などが浮かび上がってきた。こうした知的障害のある人の性に関する問題は「学校入学前から」存在し、学校で性教育を行っただけでは解決されず、学校卒業後の就労の場における課題としても残されている可能性を示唆していた。

では、学校卒業後の就労の場で、知的障害のある人の性の問題にどのように対処しているのであろうか。学校卒業後の就労の場で直面する利用者の「性の問題」に対して、多くの就労支援事業所で「支援会議・職員会議を開き、個別に状況を把握し支援」（60.8%）、「保護者や相談員と相談・協力」（20.9%）、「他機関と連携」（12.0%）（いずれもn=158）などの対処が行われていた。このように、就労の場で多岐にわたる「性の問題」が利用者に見られているものの、「性に関する教育／勉強会」などはほとんどなされておらず（89.6%，n=173）、研修会などへの参加等を通して対処法を学ぼうとしているのが実態だった。それは、「働くことが中心・機会がない・時間が取れない」（18.6%，n=172）などの理由からであり、自分たちの職場で性教育や性の勉強会を行うことは实际的に困難な状況にあった。また、「利用

者個々の理解が異なる・個別で状況が違うため」(4.7%)、こうした利用者実態に対応できる「適した職員がいない・ツール不足」のため「教え方がわからない」(16.3%) (いずれもn=172) といった悩みなども浮かび上がってきていた。そのため、性教育を行うとしても、春休み・冬休み・夏休みなどの「休暇」(47.8%, n=67) を使って集中的に行うのが精一杯というのが実態であった。

このような実態を受け、「性知識の理解と性知識を習得するために・望まない妊娠を避けるために・性被害に遭わないために」(37.5%) や「社会人として必要だから・男女が共に働いているため・全ての人に必要」(25.0%) (いずれもn=104) など、利用者の性的な問題やニーズに何らかの形で対処していく必要性を感じているようだった。

上記のことから分かるように、知的障害のある人の性に関する認知・理解の困難さが指摘されており、学校卒業後の就労の場で性に関する情報の提供や性教育などの取り組みを行うことを躊躇しているような実態が見受けられた。そこで、本研究では、知的障害のある人の性に関する認知・理解にはどのような難しさがあり、それはどうしてなのかを検討し、学校卒業後の就労の場などで働いている知的障害のある人たちに性に関する情報をどのように提供していったらよいのか、どうしたら就労している利用者にも性教育を実施することができるのか、を検討することを目的とする。

1.2 方法

知的障害のある人の性に関する認知・理解度を調査し、何が難しくてどんなことなら理解しているのかを明らかにするために、A県B市にあるC就労支援事業所及びD県E市にあるF就労支援事業所で、2020年12月から2021年1月にかけて、調査を行った。なお、本研究は、浦和大学・浦和大学短期大学部研究倫理審査規程に基づく研究倫理審査委員会による倫理審査の承認⁵を得た後、調査対象者が所属する各社会福祉法人との間で「業務委託契約」を交わし、調査対象者本人や保護者から書面で了解を得て調査を実施した。

調査対象者はC就労支援事業所で働く利用者20人(男女各10人、26歳～51歳の知的障害者)及びF就労支援事業所で働く利用者15人(男8人・女7人、19歳～65歳の知的障害者)で、C就労支援事業所及びF就労支援事業所の協力を得て、面接法により行った。

調査は性といった個人のプライバシーに関わるデリケートな問題を取り扱っていたため、面接は第三者の立ち会いの下、対象者と調査員の性別を一致させて(女性調査員は女性対象者に、男性調査員は男性対象者に)実施した。面接に要した時間は一人平均約20～40分であった。

調査内容は、「健康一般」「衛生」「人間の体」「成長」「性と対人関係」の五つの領域から成っており、それぞれの領域の項目を「健康一般」から「性と対人関係」まで順に1～35までの項目番号を付し、各項目毎に項目の内容に見合う白黒の絵または写真を用意した。なお、各領域の項目番号と項目内容は、下記の通りである。

健康一般（6項目）：1. 食事、2. 運動、3. 睡眠、4. 病気、5. 喫煙、6. 飲酒
 衛生（6項目）：7. 月経、8. 入浴、9. 洗濯、10. 整髪、11. 爪切、12. 歯磨き
 人間の体（12項目）：13. 体、14. 骨、15. 筋肉、16. 心臓、17. 肺、18. 脳、19. 目、20. 耳、
 21. 口、22. 乳房、23. ペニス、24. 子宮
 成長（5項目）：25. 成長、26. 裸の男性、27. 裸の女性、28. 裸の女性と着服の女性、
 29. 裸の男性と着服の男性
 性と対人関係（6項目）：30. 交際、31. 結婚、32. 性交、33. 避妊、34. 妊娠、35. 出産

それぞれの項目に対して、絵や写真を提示しながら、「この絵／写真は何ですか」という質問を行なった。得られた回答は、「部分的かつ具体的」な認知・理解のレベル1から「全体的かつ抽象的」な認知・理解のレベル3まで、「1」「2」「3」という三つのレベルに分類した。なお、「わからない」とか間違った回答をした場合にはレベル0とし、新たに「0」を加えて「0」「1」「2」「3」という四つのレベルを設けた。

調査を実施するにあたり、河東田の先行研究⁶と同じ研究方法を採用した。これまでに3回（1989-1990年・1994年・2016年）⁷、同様の研究を行ってきており、研究方法と回答内容の分析の妥当性が確認されてきている。なお、統計処理はカイ2乗検定（以下、 χ^2 検定）により行い、有意水準を $p < 0.05-0.001$ で表わした。

2. 結果

2.1 対象者と障害支援区分との関係

対象者と対象者の支援（介護給付）の必要度を表す障害支援区分⁸との関係を調べるために、表1にC就労支援事業所の男女の障害支援区分の該当者数とF就労支援事業所の男女の障害支援区分の該当者数の分布の様子を示した。また、表1中の（1） χ^2 はC就労支援事業所の男女間の χ^2 値と有意差の有無を、（2） χ^2 はF就労支援事業所の男女間の χ^2 値と有意差の有無を、（3） χ^2 はC就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間の χ^2 値と有意差の有無を示している。

表1が示すように、C就労支援事業所の男女間及びF就労支援事業所の男女間、さらに、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間の有意差は見られなかった。

表1. 対象者の障害支援区分（実数は人数）

障害支援 区分	C就労支援事業所（C）			F就労支援事業所（F）			(3) χ^2
	男	女	(1) χ^2	男	女	(2) χ^2	
1	0	1	1.112 [†]	1	1	1.049 [†]	3.675 [†]
2	4	4		4	5		
3	5	4		3	1		
4	1	1		0	0		
計	10	10		8	7		

[(1) χ^2 =C男女間, (2) χ^2 =F男女間, (3) χ^2 =C・F事業所（男女計）間, [†]有意差なし, df=3]

2.2 各就労支援事業所における知的障害のある人の性に関する認知・理解の特徴

表2には、C就労支援事業所とF就労支援事業所の対象者の性に関する認知・理解度（レベル0～3）の回答（実数）分布を男女別に示してある。表2に示してある（1） χ^2 は、C就労支援事業所の男女間の回答（実数）分布の χ^2 値と有意差の有無を示し、（2） χ^2 は、F就労支援事業所の男女間の回答（実数）分布の χ^2 値と有意差の有無を示している。また、（3） χ^2 は、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間の回答（実数）分布の χ^2 値と有意差の有無を示している。

（1）知的障害のある人の認知・理解の特徴

a. 健康一般

C就労支援事業所及びF就労支援事業所の半数または過半数の男女に「1. 食事」「2. 運動」「3. 睡眠」「5. 喫煙」の四つの項目でレベル3が多く見られていた。また、C就労支援事業所の半数または過半数の男女が「4. 病気」の項目でレベル3だったのに対し、F就労支援事業所の男女が共にレベル3とレベル1が半数ずつに分かれていた。「6. 飲酒」の項目は、C就労支援事業所もF就労支援事業所も、半数または過半数の男女の認知・理解が不十分で、レベル1またはレベル0のままだった。さらに、C就労支援事業所の女性やF就労支援事業所の男性の「2. 運動」の項目で、認知・理解の不十分さを示すレベル1がやや多く見られていた。同様に、C就労支援事業所の男女とF就労支援事業所の男女にも、「4. 病気」や「6. 飲酒」の項目で、認知・理解の不十分さを示すレベル1とレベル0が多く見られ、半数近くを占めていた。なお、「健康一般」の領域では、C就労支援事業所の男女間にもF就労支援事業所の男女間にも有意差は見られなかった。また、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）の間にも有意差は見られなかった。

b. 衛生

C就労支援事業所の女性の約半数及びC就労支援事業所の男性とF就労支援事業所の大多数の男女が、「7. 月経」の項目で認知・理解の不十分さを示すレベル1とレベル0だった。また、C就労支援事業所の半数以上の男女が、「8. 入浴」「9. 洗濯」の項目でレベル3（女性の「洗濯」はレベル3及びレベル2が半数ずつ）だったが、F就労支援事業所の男女は共にレベル3がほとんどなく、大多数がレベル2からレベル0だった。さらに、C就労支援事業所及びF就労支援事業所の半数以上または大多数の男女が、「10. 整髪」「12. 歯磨き」の二つの項目で、レベル3が多く見られていた。また、C就労支援事業所の男性全員及びほとんどの女性が、「11. 爪切」「12. 歯磨き」の項目で、レベル3だった。一方、「11. 爪切」の項目で、F就労支援事業所の男性が全員レベル3だったのに対し、女性の半数以上がレベル2及びレベル1だった。なお、「衛生」の領域では、C就労支援事業所の男女間にもF就労支援事業所の男女間にも有意差は見られなかった。一方、（3） χ^2 からも分かるように、「8. 入浴」（ $p<0.01$ ）「9. 洗濯」（ $p<0.01$ ）の両項目で、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）の間で有意差が見られていた。

c. 人間の体

「13. 体」の項目では、C就労支援事業所の男性でレベル3及びレベル2が半数以上を占めていたものの、C就労支援事業所の女性では全員がレベル2からレベル0に分布し、F就労支援事業所の男女の大多数がレベル1からレベル0だった。「14. 骨」の項目では、C就労支援事業所の男女の半数がレベル3だったのに対して、F就労支援事業所の男女の大多数がレベル2からレベル0だった。「15. 筋肉」の項目では、C就労支援事業所の女性で半数以上のレベル3が見られたものの、C就労支援事業所の男性やF就労支援事業所の男女で、約半数または半数以上がレベル1からレベル0だった。「16. 心臓」の項目では、C就労支援事業所の女性の大多数がレベル3だったものの、C就労支援事業所の男性でレベル3及びレベル0に分布が分かれていた。F就労支援事業所の男性でレベル3とレベル1及びレベル0に分布が分かれていたのに対し、F就労支援事業所の半数の女性がレベル0だった。「17. 肺」の項目では、C就労支援事業所の男女及びF就労支援事業所の男女が共に、レベル3及びレベル0、または、レベル1及びレベル0に回答の分布が分かれていた。また、「18. 脳」の項目では、C就労支援事業所の男女及びF就労支援事業所の男性の大多数がレベル3だったのに対し、F就労支援事業所の女性はレベル3からレベル0まで広く回答が分布していた。さらに、「19. 目」や「20. 耳」「21. 口」の各項目では、C就労支援事業所の男女及びF就労支援事業所の男女の大多数がレベル3だった。「22. 乳房」の項目では、C就労支援事業所の男女及びF就労支援事業所の男性の大多数がレベル3だったのに対し、F就労支援事業所の女性はレベル3からレベル0まで広く回答が分布していた。「23. ペニス」の項目では、C就労支援事業所の男女及びF就労支援事業所の男性の大多数がレベル3だったのに対し、F就労支援事業所の女性はレベル1からレベル0だった。また、「24. 子宮」の項目では、C就労支援事業所の男女及びF就労支援事業所の男女が共に、レベル3からレベル0まで広く回答が分布していた。なお、「人間の体」の領域では、C就労支援事業所の男女間で、「13. 体」($p<0.01$)の項目で有意差が見られたものの、それ以外の「14. 骨」～「24. 子宮」の項目では有意差が見られなかった。また、F就労支援事業所の男女間では、「13. 体」～「24. 子宮」の全項目で有意差が見られなかった。一方、(3) χ^2 から分かるように、「13. 体」($p<0.01$)「14. 骨」($p<0.01$)「22. 乳房」($p<0.05$)の三つの項目で、C就労支援事業所(男女計)とF就労支援事業所(男女計)との間で有意差が見られていた。

d. 成長

「25. 成長」の項目では、C就労支援事業所の男女の半数及びF就労支援事業所の男性の半数がレベル3だったのに対し、F就労支援事業所の女性でレベル1及びレベル0だった。また、「26. 裸の男性」や「27. 裸の女性」「28. 裸の女性と着服の女性」「29. 裸の男性と着服の男性」の各項目では、C就労支援事業所の男女でレベル3からレベル0まで広く回答が分布していたが、F就労支援事業所の男女ではレベル2からレベル0まで広く回答が分布していた。特に特徴的なのは、「27. 裸の女性」の項目で、C就労支援事業所の男女がレベル3とレベル2に分布していたのに対し、F就労支援事業所の男女がレベル1からレベル0までの回

表2. 対象者の事業所・領域・項目毎の性に関する認知・理解度の回答（実数）分布（実数は人数）

領域	項目	C 就労支援事業所			(1) χ^2	F 就労支援事業所		(2) χ^2	(3) χ^2
		男	女	男		女			
		レベル	レベル	レベル		レベル			
		0 1 2 3	0 1 2 3	0 1 2 3		0 1 2 3			
健康一般	1	2 1 1 6	0 3 0 7	4.076†	0 1 2 5	0 1 1 5	0.265†	3.413†	
	2	1 1 1 7	0 3 0 7	3.000†	0 3 0 5	1 1 1 4	3.058†	0.380†	
	3	0 0 1 9	0 2 2 6	2.932†	0 0 2 6	0 1 1 5	1.362†	0.237†	
	4	2 2 0 6	0 4 1 5	3.760†	0 4 0 4	0 3 1 3	1.225†	2.295†	
	5	1 0 1 8	1 0 1 8	0	0 1 2 5	0 1 0 6	2.033†	4.295†	
	6	3 3 1 3	2 3 2 3	0.532†	0 5 1 2	2 5 0 0	4.954†	4.663†	
衛生	7	4 4 1 1	2 2 0 6	5.908†	2 5 0 1	2 4 0 1	0.044†	4.144†	
	8	1 0 4 5	0 0 5 5	1.112†	2 4 1 1	1 2 4 0	3.749†	15.099**	
	9	2 0 2 6	1 2 4 3	4.000†	0 5 1 2	1 5 1 0	2.945†	12.322**	
	10	1 1 1 7	0 1 1 8	1.068†	0 2 1 5	0 2 0 5	0.936†	2.331†	
	11	0 0 0 10	0 0 1 9	1.052†	0 0 0 8	0 2 2 3	6.232†	3.826†	
	12	0 0 0 10	0 1 0 9	1.052†	0 0 1 7	0 2 0 5	3.279†	2.242†	
人間の体	13	3 0 3 4	1 4 5 0	9.512**	3 5 0 0	2 4 0 1	1.250†	11.351**	
	14	3 1 1 5	2 1 2 5	0.532†	0 3 4 1	1 3 3 0	2.085†	13.184**	
	15	4 2 2 2	3 1 0 6	4.476†	4 1 1 2	3 3 1 0	3.090†	3.091†	
	16	5 0 0 5	2 0 0 8	1.976†	2 1 0 5	4 1 0 2	1.892†	3.226†	
	17	4 0 1 5	5 0 0 5	1.112†	2 2 0 4	3 1 0 3	0.611†	5.059†	
	18	1 0 1 8	1 0 1 8	0	1 1 1 5	2 1 1 3	0.767†	4.238†	
	19	0 0 0 10	0 0 0 10	0	0 1 1 6	0 2 0 5	1.362†	6.018†	
	20	0 0 0 10	0 0 0 10	0	0 2 0 6	1 1 1 4	2.676†	7.774†	
	21	0 0 0 10	0 0 0 10	0	0 1 0 7	0 2 1 4	2.093†	6.018†	
	22	3 0 0 7	1 0 0 9	1.252†	0 1 1 6	1 2 1 3	2.274†	8.211*	
	23	3 0 0 7	3 0 1 6	1.076†	2 0 1 5	3 3 0 1	6.831†	5.059†	
	24	4 0 2 4	2 1 4 3	2.480†	3 2 2 1	3 3 1 0	1.471†	7.607†	
成長	25	2 2 1 5	0 4 0 6	3.760†	1 2 1 4	1 5 0 1	4.034†	1.645†	
	26	2 3 2 3	1 2 4 3	1.200†	1 5 2 0	2 4 1 0	0.711†	7.582†	
	27	2 2 3 3	1 2 5 2	1.032†	1 6 1 0	3 3 1 0	1.941†	10.159*	
	28	2 2 2 4	0 6 1 3	4.476†	1 6 1 0	1 4 1 1	1.338†	4.295†	
	29	1 4 1 4	0 7 0 3	2.964†	1 6 1 0	1 4 1 1	1.338†	4.589†	
性と対人関係	30	2 0 0 8	0 0 3 7	5.068†	1 1 1 5	0 3 1 3	2.443†	6.071†	
	31	5 0 1 4	0 0 0 10	8.572**	2 0 1 5	1 1 0 5	2.274†	1.482†	
	32	5 0 1 4	5 1 1 3	1.144†	4 1 0 3	6 0 0 1	2.342†	2.148†	
	33	5 2 1 2	3 1 3 3	2.032†	5 2 1 0	6 1 0 0	1.362†	6.692†	
	34	1 4 2 3	0 3 1 6	2.476†	1 3 1 3	1 2 3 1	2.142†	2.058†	
	35	3 1 2 4	0 3 3 4	4.200†	1 5 1 2	0 6 1 0	6.051†	7.590†	

注1 各項目番号の内容：1. 食事、2. 運動、3. 睡眠、4. 病気、5. 喫煙、6. 飲酒、7. 月経、8. 入浴、9. 洗濯、10. 整髪、11. 爪切、12. 歯磨き、13. 体、14. 骨、15. 筋肉、16. 心臓、17. 肺、18. 脳、19. 目、20. 耳、21. 口、22. 乳房、23. ペニス、24. 子宮、25. 成長、26. 裸の男性、27. 裸の女性、28. 裸の女性と着服の女性、29. 裸の男性と着服の男性、30. 交際、31. 結婚、32. 性交、33. 避妊、34. 妊娠、35. 出産

注2 (1)&(2) χ^2 =男女間回答（実数）分布の有意差、(3) χ^2 =C就労支援事業所（男女計）・F就労支援事業所（男女計）間回答（実数）分布の有意差。†有意差なし、* $p<0.05$ 、** $p<0.01$ 、 $df=3$

答が多く分布していた。また、F就労支援事業所の男女の「26. 裸の男性」や「27. 裸の女性」「28. 裸の女性と着服の女性」「29. 裸の男性と着服の男性」の各項目の半数以上がレベル1の回答に多く分布していたのに対し、C就労支援事業所の「28. 裸の女性と着服の女性」「29. 裸の男性と着服の男性」の2項目だけがレベル1の回答に多く分布していた。なお、「成長」の領域では、C就労支援事業所の男女間でもF就労支援事業所の男女間でも有意差は見られなかった。しかし、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間の「27. 裸の女性」（ $p<0.05$ ）の項目では有意差が見られていた。

e. 性と対人関係

「30. 交際」の項目では、半数近くまたは大多数がレベル3だった。また、「31. 結婚」の項目では、C就労支援事業所の女性及びF就労支援事業所の男女で大多数がレベル3だったものの、C就労支援事業所の半数の男性がレベル0だった。さらに、「32. 性交」及び「33. 避妊」の各項目では、C就労支援事業所の男女がレベル3からレベル0まで広く回答が分布していたが、F就労支援事業所の大多数の男女ではレベル1からレベル0またはレベル0に回答が分布していた。また、C就労支援事業所の男女も見てみると、半数または半数近くがレベル0だった。また、「34. 妊娠」の項目では、C就労支援事業所の男女もF就労支援事業所の男女も、レベル3からレベル0まで広く回答が分布していた。C就労支援事業所の半数以上の女性は、レベル3だった。また、「35. 出産」の項目では、C就労支援事業所の男女もF就労支援事業所の男女もレベル3からレベル0まで幅広く回答が分布していたが、F就労支援事業所の男女にレベル1の回答が多く分布していた。なお、「性と対人関係」の領域では、C就労支援事業所の男女間で、「31. 結婚」（ $p<0.01$ ）の項目で有意差が見られたものの、それ以外の「30. 交際」「32. 性交」～「35. 出産」の項目では有意差が見られなかった。また、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）の間でも有意差は見られなかった。

（2）知的障害のある人の認知・理解の特徴：認知・理解し易い項目と理解困難な項目

分析結果が示しているように、C就労支援事業所及びF就労支援事業所共に、就労支援事業所の対象者の性に関する認知・理解度は、調査項目毎に異なっており、大きな個人差が見られていた。

C就労支援事業所の対象者に係る性に関する認知・理解度を見てみると、「衛生」領域の「爪切」「歯磨き」、「人間の体」領域の「目」「耳」「口」などは、認知・理解が高く理解し易い項目となっており、「人間の体」領域の「肺」、「性と対人関係」領域の「性交」「避妊」などは認知・理解が比較的低くやや理解困難な項目となっていた。また、「人間の体」領域の「筋肉」「心臓」「肺」「乳房」「ペニス」、「性と対人関係」領域の「結婚」などは、認知・理解の幅が大きく、回答の有無がはっきりしている項目となっていた。

F就労支援事業所の対象者に係る性に関する認知・理解度を見てみると、C就労支援事業所の対象者と同様、「衛生」領域の「爪切」「歯磨き」、「人間の体」領域の「目」「耳」「口」などは、特に男性で認知・理解が高く理解し易い項目となっており、「人間の体」領域の

「体」「筋肉」、「性と対人関係」領域の「性交」「避妊」などは認知・理解が比較的低くやや理解困難な項目となっていた。また、「人間の体」領域の「筋肉」「心臓」「肺」「ペニス」「子宮」などは、認知・理解の幅が大きく、回答の有無がはっきりしている項目となっていた。

C就労支援事業所及びF就労支援事業所の対象者の性に関する認知・理解度調査結果を受けて整理できることは、認知・理解しやすい項目は、絵や写真自体がシンプルで分かりやすく、日常よく見聞きし日常生活としっかり結びついているものとなっていたということである。一方、認知・理解困難な項目や認知・理解の幅が大きく、回答の有無がはっきりしている項目は、示された絵や写真が複雑で日常生活の中で聞いたことがあっても教育を通して情報を得たことのない項目や日頃口に出してはいけないと思われる性器（「乳房」「ペニス」）などへの恥じらいによる反応と思われた。また、C就労支援事業所の男女間に有意差が見られた項目も同様で、「人間の体」領域の「体」など、裸の男女の絵や写真が使用されていたことによる恥じらいによるものと思われた。

2.3 各就労支援事業所の男女間及び就労支援事業所（男女計）間の知的障害のある人の性に関する認知・理解の特徴

C就労支援事業所の対象者の性に関する認知・理解に関して、「人間の体」領域の「体」（ $p<0.05$ ）と「性と対人関係」領域の「結婚」（ $p<0.01$ ）を除く33項目は、男女間に有意差が見られなかった（表2の（1） χ^2 参照）。同様に、F就労支援事業所の対象者の性に関する認知・理解における全35項目で、男女間に有意差が見られなかった（表2の（2） χ^2 参照）。

C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間で有意差が見られたのは、「衛生」領域の「入浴」（ $p<0.01$ ）と「洗濯」（ $p<0.01$ ）、「人間の体」領域の「体」（ $p<0.01$ ）と「骨」（ $p<0.01$ ）と「乳房」（ $p<0.05$ ）、「成長」領域の「裸の女性」（ $p<0.05$ ）だった（表2の（3） χ^2 参照）。なお、C就労支援事業所の男女間に有意差が見られていた「人間の体」領域の「体」がC就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間でも同様の有意差が見られていたものの、C就労支援事業所の男女間に有意差が見られていた「性と対人関係」領域の「結婚」はC就労支援事業所（男女計）・F就労支援事業所（男女計）間での有意差は見られなかった。

C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）との間で有意差が見られなかった「性と対人関係」領域の「結婚」を除き、両事業所（男女計）間に有意差が見られた「衛生」領域の「入浴」と「洗濯」、「人間の体」領域の「体」と「骨」と「乳房」、「成長」領域の「裸の女性」など6項目について、その特徴を見ていくことにする。

表3には、C就労支援事業所の男女間で有意差が見られた項目を「有意差カテゴリー1」、F就労支援事業所の男女間で有意差が見られた項目を「有意差カテゴリー2」、C就労支援事業所（男女計）・F就労支援事業所（男女計）間で有意差が見られた項目を「有意差カテゴリー3」と示してある。「有意差カテゴリー1」には「人間の体」領域の「体」と「性と

対人関係」領域の「結婚」が、「有意差カテゴリー2」には全35項目有意差がないため「該当なし」の斜線が、「有意差カテゴリー3」には「衛生」領域の「入浴」「洗濯」、「人間の体」領域の「体」「骨」「乳房」、「成長」領域の「裸の女性」が表記されている。

C就労支援事業所の男女間に有意差が見られていた「人間の体」領域の「体」は、裸の男女の絵や写真が使用されていたことによる恥じらいによるものと思われたが、C・F両就労支援事業所（男女計）間で有意差が見られた6項目は、いずれも複数の絵や写真が組み合わせられ、全体を把握してその概念を答えてもらうという抽象度の高い項目で、簡単には回答できず、認知・理解が困難で、対象者の認知・理解の幅も大きくなったために、両事業所（男女計）間で有意差が見られていたと思われた。

表3. 各有意差カテゴリーの該当項目表

有意差カテゴリー1	有意差カテゴリー2	有意差カテゴリー3
体** 結婚**		入浴** 洗濯** 体** 骨** 乳房* 裸の女性*

カテゴリー1：C就労支援事業所男女間の有意差 ** $p<0.05$, ** $p<0.01$, $df=3$

カテゴリー2：F就労支援事業所男女間の有意差 該当なし

カテゴリー3：C・F就労支援事業所（男女計）間の有意差 ** $p<0.01$, $df=3$

2.4 性に関する三つの認知・理解群とその特徴

知的障害のある人の認知・理解度を把握するために、対象者の認知・理解レベル3を3点、認知・理解レベル2を2点、認知・理解レベル1を1点、認知・理解レベル0を0点として得点化し、対象者の総得点の状況を見てみた。105点が満点となるため、100点満点として補正をすると、認知・理解の程度によって、80～100点をA群、60～79点をB群、0～59点をC群と、三つの群に整理できることが分かった。

A群は、総じて認知・理解度が高い対象者が多い群だった。絵や写真に対する認知・理解度レベル2以上が多く、抽象的理解ができており、有意な回答をしていた。これらの群に属している人たちは、障害支援区分とは一致していないものの、知的能力が高く、教育や社会的経験を通して得た情報量が豊富であった。

B群は、絵や写真には反応するものの抽象的理解が苦手な対象者が多い群だった。絵や写真に対する認知・理解度が低く、レベル1～3まで多様な回答分布を示していた。抽象的理解を要する回答になると途端に要領を得なくなり、結果としてレベル0のような「わからない」といった回答にもなっていた。この群に属する対象者は、認知・理解に大きな差が見られるものの、教育や社会的体験の積み重ねによって認知・理解を高めていくことのできる群

のように思われた。

C群は、総じて認知・理解度が低い対象者が多い群だった。多くがレベル0か1で、限られた項目だけがレベル2や3といった結果であった。レベル3に相当する項目は、「衛生」領域の「歯磨き」や「人間の体」領域の「目」「耳」「口」「乳房」で、日常よく見聞きし日常生活の中でよく使われている分かりやすい絵や写真であった。時に言葉だけに反応している場合もあった。この群に属しているのは、抽象的理解の困難な人たちで、認知・理解を高めるための関わり方や教材教具の工夫と開発がより一層求められる群でもあった。

A群・B群・C群、どの群にも共通して見られていた事柄の一つに、文化的な影響による恥じらいや沈黙があった。つまり、裸や性器など人前で見せてはいけない、表現してはいけないモラルに関係している絵や写真に対してであり、恥ずかしがったり、わざと答えなかったり、「わからない」と回答していたことである。このような対応は認知・理解度が高いA群の人たちの間でも見られ、「性と対人関係」領域の「性交」などでは、レベル0が多く見られていた。

性に関する認知・理解度調査結果は、学校を卒業してからも、仕事をしている今でも、恋愛関係にある人たちも、結婚し家庭生活を営もうとしている人たちも、生涯にわたって、知的障害のある人の認知・理解度に合わせて様々な情報を的確に、繰り返し提示していく必要があることを示していた。本研究結果に基づいて行われる性教育実践も、認知・理解度に大きな差がある人たちにいつも一緒に教育することではなく、時に個別に、時に認知・理解度に合わせた少なくとも三つの群（A・B・C群）を作り、群毎に必要な情報を的確に、分かりやすく丁寧に、繰り返し提供していくことが必要だということを示していた。

性に関する認知・理解度の群分けと障害支援区分との関係についても整理しておく必要がある。

表4. 対象者の性に関する認知・理解群と障害支援区分との関係（実数は人数）

障害 支援 区分	C就労支援事業所（C）				(1) χ^2	F就労支援事業所（F）			(2) χ^2	(3) χ^2
	男 群	女 群	計 群	男 群		女 群	計 群			
	A B C	A B C	A B C	A B C		A B C	A B C			
1	1 0 0	1 0 0	2 0 0	A=0.192 †	0 1 0	0 1 0	0 2 0	A=0	A=1.143 †	
2	2 0 3	1 1 2	3 1 5	B=1.200 †	1 2 1	0 1 4	1 3 5	B=0.192 †	B=4.233 †	
3	1 3 0	1 2 1	2 5 1	C=2.099 †	0 1 2	0 1 0	0 2 2	C=6.191 †	C=1.332 †	
4	0 0 0	0 0 1	0 0 1		0 0 0	0 0 0	0 0 0			
計	10	10	20		8	7	15			

[認知・理解群・補正点：A群＝80～100, B群＝60～79, C群＝0～59, (1) χ^2 ＝C男女間, (2) χ^2 ＝F男女間, (3) χ^2 ＝C・F事業所（男女計）間, 有意差なし†, df=3]

本研究の対象者は区分1～4で、C就労支援事業所に区分4該当者が1人いるものの、多くは区分1～3の比較的支援の必要度が低い利用者だった。また、表4から分かるように、C就労支援事業所の性に関する認知・理解の各群「A・B・C」と障害支援区分「1～4」との間に有意差は見られなかった（表4の（1） χ^2 参照）。同様に、F就労支援事業所の性に関する認知・理解の各群「A・B・C」と障害支援区分「1～4」との間にも有意差は見られなかった（表4の（2） χ^2 参照）。さらに、C就労支援事業所（男女計）とF就労支援事業所（男女計）の性に関する認知・理解の各群「A・B・C」と障害支援区分「1～4」との間にも有意差は見られなかった（表4の（3） χ^2 参照）。つまり、性に関する認知・理解度は、障害支援区分とはほとんど関係がないということを意味しており、性教育を行うにあたっては、性に関する認知・理解群と個々の参加者（利用者）の特徴によって検討されるべきだということを示唆していた。

3. おわりに

知的障害のある人の身体面の発達と感情面の成達は、一般の人たちと何ら変わらないものの、これら二つの発達のアンバランスさが様々な問題を生じさせている。表現の仕方が分からなかったり未熟が故に自分の欲求を正直に現わし、周りの人たちを困惑させている。しかも、知的障害のある人の性に関する問題が、学校在籍中からも見られ、学校を卒業してからも、様々な形で現われ、時に社会問題ともなってしまうという実態がある。

知的障害のある人の性に関する問題をあいまいなままにし、学校を卒業してからも情報の整理の仕方を教えずに放置してしまうなら、社会にあふれる性的誘惑に飲み込まれ、自分ではどうしようもない状況に追い込まれてしまうということに、私たちは気づく必要がある。

学校でも学校卒業後の就労の場でも知的障害のある人たちの性の問題を見て見ぬふりをすることができない状況にあるとしたなら、何らかの形で性に関する取り組みを組織的にしていく必要がある。しかし、実際は、「知的障害と性」に対する長い歴史的経緯の中で刷り込まれた知的障害のある人に対する負のイメージ、性に関する情報提供の困難さ、知的発達の遅れがもたらす抽象的理解の困難さなどにより、性に関する取り組みは甚だ遅れている。そこで、性に関する情報提供の困難さの克服、知的障害のある人にも理解できるように工夫された分かりやすい情報の提供、生涯学習を通じた性教育の実施など、性支援に向けた具体的な取り組みが求められてくる。これらを組み合わせて、社会的かつ組織的に、整備していく必要がある。そこで、知的障害のある人の性支援に必要と思われることを「知的障害のある人の性支援を円滑に進めるための社会的包括支援モデル」として、図1のように提示してみたい。

「知的障害のある人の性支援を円滑に進めるための社会的包括支援モデル」では、性に関する「自己決定」や「個別ニーズの尊重」「当事者参画」を基本とし、「支援者の価値観の共有・対人関係の調整」や「認知・理解の向上・分かりやすい情報の提供」、「人的・組織的包括支援ネットワークの構築」や「教育・福祉・就労・生涯学習間の連携」など、社会的に必

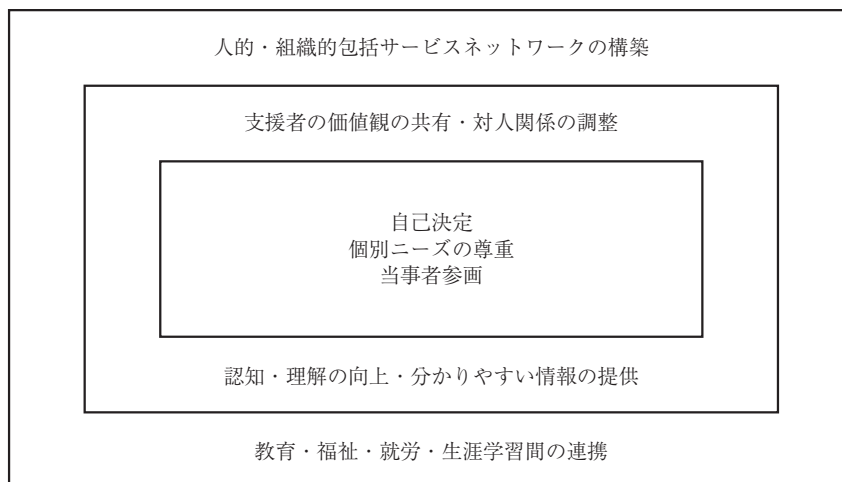


図1. 知的障害のある人の性支援を円滑に進めるための社会的包括支援モデル

要とされるミクロレベルからマクロレベルまでの包括的な支援の内容を示してある。福祉が進んでいる国々では、労働政策と連動させながら性に関する学びの場（性教育）を生涯学習の一環として保障しようとしている。つまり、就労支援事業所などで働いていても、週に1回（半日または1日）の生涯学習の場は無償で、仲間と共に参加し、性に関する具体的な情報を得られるようになっている。このような仕組みを制度（事業）として取り入れることが出来れば、教育・福祉・就労・生涯学習を行っている諸団体とも連携しながら対処していくことができるはずである。

多くの知的障害のある人は、異性との交際を望み、性的体験を求め、温かな人との触れ合いを求めている。異性との関係を築きながら、幸せになりたい、安定した関係を持ちたいと望んでいる。私たちは、そうした彼らの思いや願いを積極的に受け止め、環境整備をし、実現できるように支援をしていく必要がある。私たちがなし得る様々な努力を通して、共に生き、共に暮らし、知的障害のある人たちの性に関する諸権利が達成できるような社会にしていかなければならない。

謝辞

本稿は、2019年度～2022年度日本学術振興会科学研究費助成事業（科学研究費補助金）・基盤調査（B）（一般）（課題番号：19H01568）「知的障害のある人の性をめぐる社会的実態と性教育のあり方に関する研究」の研究成果の一部である。本研究にご協力いただいた関係機関・関係者に謝意を表したい。

引用文献・注

- 1 Katoda, H. *Health and sex education of schoolchildren with intellectual handicaps - A study in Japan and Sweden.*, Almqvist & Wiksell International, 1991, 141p.

- 2 河東田博, 井上須美子, 沖美智子, 他. 知的ハンディをもつ人々の健康・性・エイズ情報獲得プロセスに関する調査. JASS PROCEEDINGS. 1995. 7 巻, 1 号, p32-41.
- 3 知的障害のある子どもの性教育に直接・間接に関わっている養護教諭から実態を把握すると共に、今後性教育をどのように行っていったらよいのかの示唆を得るための全国アンケート調査である。この調査は、全国500ヶ所の特別支援学校に勤める養護教諭500人を対象に、2020年2月10日から3月10日までの1ヶ月間、学校で知的障害のある子どもたちの性の問題に直面したことがあるかどうか、性の問題に直面した際どう対処したか、健康や性に関する教育をどのような内容で、どの程度実施しているかどうか、などを把握するために行った。回収率は、27.0%（135人）だった。
（河東田博. 知的障害のある人の性に関するアンケート調査結果報告書. 2020年度科学研究費補助金研究・基盤研究B・研究代表者：河東田博. 2021. 118p., p.2)
- 4 学校卒業後、就労支援を通して日頃知的障害のある人に関わっており、現場で指導的立場にいるサービス管理責任者から知的障害のある人の性に関する実態を把握すると共に、今後利用者の性教育をどのように行って行こうとしているのかを把握するための全国アンケート調査である。この調査は、全国500ヶ所の就労継続支援A型及び／または就労継続支援B型を営む就労支援事業所に勤めるサービス管理責任者500人を対象に、2020年2月10日から3月10日までの1ヶ月間、事業所内で知的障害のある人たちの性の問題に直面したことがあるかどうか、性の問題に直面した際どう対処したか、健康や性に関する教育をどのような内容で、どの程度実施しているかどうか、などを把握するために行った。回収率は34.6%（173人）だった。（同上報告書. p.7)
- 5 浦和大学・浦和大学短期大学部研究倫理審査規程に基づく研究倫理審査委員会・倫理審査承認の5前提があったため、次のように対処した。
 1. 調査対象となる福祉関係機関（社会福祉法人、以下「法人」）から、本調査の目的・方法などを理解し協力する旨の同意書を得た。
 2. 知的障害のある人の保護者からも、本調査の目的・方法などを理解し協力する旨の同意書を得た。
 3. 知的障害のある人の認知・理解力等に関する調査を実施するにあたり、第三者に立ち会ってもらった。
 4. 秘匿性に留意し、調査対象となる法人や個人の映像はとらずに調査を行った。
 5. 調査協力者にも、本調査の目的・方法などを理解してもらい、十分な倫理的配慮をもって協力していただけるように、各法人と「業務委託契約書」を交わした。
- 6 下記文献の中で本研究に係る調査方法が示されている。
Katoda, H. The cognition of matters on health and sex in young people with intellectual handicaps: a study in Stockholm and Tokyo. European Journal of Special Needs Education. 1992, vol 7, no.2, p117-129.
- 7 これまでに行ってきた3回の調査とは次の通りである。
 - (1) 1989年1月から3月にかけて東京都で、1990年4月から6月にかけてスウェーデン国ストックホルム県で行った調査で、同上論文（Katoda, 1992）に反映されている。
 - (2) 1994年1月から3月にかけて香川県・徳島県で行った調査で、前掲論文（河東田他、1995年）に反映されている。
 - (3) 2016年2月に茨木県で行った調査で、下記論文に反映されている。
河東田博. 知的障害のある人たちの性に関する認知・理解の実態と課題. 立教社会福祉研究. 2017, 36号, p1-8.
- 8 障害支援区分は、2013年に施行された障害者総合支援法（正式名称：障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律）第4条第4項の中で、「障害の多様な特性その他の心身の状

態に応じて必要とされる標準的な支援の度合を総合的に示すもの」と定義づけられている。なお、障害支援区分は6段階に区分（区分1～6）され、区分が高くなるほど支援程度の必要度が高く、区分6が最も高い必要度となる。

参考文献

[和書：著書・雑誌]

[和書]

緒方直助, 大井清吉編. わたしたちのからだ. 福村出版, 1986, 120p.

河合香織. セックス ボランティア. 新潮社, 2004, 238p.

黒瀬久美子. 楽しい性教育－手作り教材のつくり方・いかし方. ハートブレイク, 2002, 80p.

黒瀬久美子. 知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援プログラム. ハートブレイク, 2005, 120p.

黒瀬清隆 編. 楽しくセクシュアリティ支援のすすめ. ハートブレイク, 2021, 36p.

小杉長平, 大井清吉, 河東田博 編. ちえ遅れの子の性と結婚の指導. 日本文化科学社, 1976, 264p.

児玉勇二. 知的・発達障害児者の人権. 現代書館, 2014, 246p.

坂爪真吾. セックスと障害者. イースト新書, 2016, 246p.

長崎・障害児への性教育を考える会. イラストでわかる養護学校の性教育事典. 明治図書, 1996, 92p.

平井威, 「ぶ〜け」共同研究プロジェクト. ぶ〜けを手わたす－知的障害者の恋愛・結婚・子育て. 学術研究出版, 2016年, 316p.

堀口雅子, 中里誠, 杉浦ひとみ, 他. 性・say・生. 全日本手をつなぐ育成会連合会, 2005, 97p.

松浦賢長 編, 松浦賢長, 千葉県立柏特別支援学校. ワークシートから始める特別支援教育のための性教育. ジアース教育新社, 2018, 242p.

松友了編. 知的障害者の人権. 明石書店, 1999, 257p.

宮原春美 監修, 宮原春美, 社会福祉法人 南高愛隣会, からだ探検隊実行委員会. からだ探検隊～障がい児・者のための性に関する対人関係教育プログラム～. 社会福祉法人 南高愛隣会, 2020, 110p.

宮原春美 監修, 宮原春美, 社会福祉法人 南高愛隣会, からだ探検隊実行委員会. からだと心のマナーブック. 社会福祉法人 南高愛隣会, 2020, 37p.

[洋書]

・英語

Boëthius C.G. *The Battle for Sex Education in Sweden. SIDA (Swedish International Development Authority): Sex education and social development. 1974, p75-83.*

Katoda, H. ; W-Lindgren, G. ; Mannerfeldt, R. *School nurses and health education for pupils with and without intellectual handicaps: a study conducted in Japan and Sweden. Nurse Educational Today, 1990, no.10, p437-447.*

Katoda, H., 1993.6, *Parents' and teachers' praxes of and attitudes of young people with mental handicaps: A study in Stockholm and Tokyo. Journal of Mental Deficiency Research, no.37, p115-129.*

Nirje, B. *The normalization principle papers. Uppsala, Sweden, 1998, 99p.*

Wolfsbrger, W. *The Principle of Normalization in Human Services. National Institute on Mental Retardation, 1981, 238p.*

・スウェーデン語

Andersson, U. ; Eklund, B. *Oss emellan. Nykterhetsrörelsens Bildningsverksamhet, 1980, 80p.*

Fonseca R. ; Nelson B., *Sex För Alla. RFSU Malmö & Grunden Malmö, 2017, 137p.*

Kollberg-Johansson, E. ; Folkesson, Y. Vi talar om sex. LTs förlag. 1984, 71p.

Laaban, I. ; Lundberg, E. Som alla andra. Föreningen Grunden, Grunden Media. 2002, 35p.

Skolverket. Sex- och samlevnadsundervisning i särskolan. Fritzes, 2014, 163p.

Summary

The cognition of matters on sex in persons with intellectual disabilities and sexuality education

Hiroshi Katoda

Persons with intellectual disabilities at C work place (10 male and 10 female) and F work place (8 male and 7 female) in each A and D prefecture were interviewed during 2020-2021. The questions concerned the areas: health in general, hygiene, the human body, growing up, and sex/interpersonal relationships. Each of the 35 items had a matching picture.

The main findings concerned the variations in the cognition of matters on sex in persons with intellectual disabilities between two work places. A few other characteristics of persons with intellectual disabilities were found in the present study concerning items which were either easy or difficult to grasp. Items which were easy to grasp for each work place were items which concerned outside of the body and simple pictures. Items which were difficult to grasp for each work place were items which concerned inside of the body and items concerning sex like sexual intercourse and contraceptives. Regarding items on sex or on naked persons it was noticed that during the interview many persons hesitated to give a definitive answer to some specific items. Moreover, persons with intellectual disabilities in this study could be classified from Mild, Moderate to Severe based on the cognitive levels.

Sexuality education must be further considered and guaranteed by all supportive services including the above results.

Keywords intellectual disabilities, sexual problems, sexuality education, cognition, social comprehensive support

(2021年11月11日受領)